



## JST だより vol.10



世界遺産 アンコール遺跡群  
バイヨン寺院ナーガ・シンハ彫像および欄干修復プロジェクト

**修復工事が完了しました！**



**8年間 応援ありがとうございました！！**



カンボジアの世界遺産、アンコール遺跡群を代表する寺院の一つバイヨン寺院は、12世紀後半にジャヤヴァルマンVII世によって建立がはじめられました。“バイヨン”とは「美しい天上の塔」を意味し、その名の通り、42mもの高さの中心塔を取り巻くように大小様々な塔が林立する寺院遺跡です。



▲バイヨン寺院の尊顔



▲修復前の正面入り口（東参道）

2020年8月31日をもって、このバイヨン寺院において2012年から8年間続いてきた「アンコール遺跡群バイヨン寺院 ナーガ・シンハ彫像および欄干修復プロジェクト」の修復が完了し、プロジェクトが終了を迎えました。このプロジェクトでは、バイヨン寺院の外回廊の入り口両脇に立つ、シンハ（ライオン）彫像、ナーガ（蛇神）彫像、そして外回廊をぐるりと囲む欄干を対象として修復事業が行われてきました。

バイヨン寺院にとって、寺院を取り囲む欄干と、入り口を護る彫像は大きく景観を左右するものであり、訪れる観光客がまず目にするものでもあります。皆様の応援とご支援のもと、9名のカンボジア人メンバーの努力のもと、壮麗な姿を取り戻すことができました。

## 修復前の彫像や欄干の様子

バイヨン寺院は20世紀初頭に一度はフランス極東学院による修復をうけているものの、その後の内戦や樹木などの影響で新たに崩落した箇所も少なくなく、現在も劣化や崩落が目立ちます。特にバイヨン寺院を訪れる観光客が必ず最初に目にし、そのすぐ脇を通ることになる外回廊や参道のナーガ、シンハ彫像や欄干が崩落したままでは、安全性や景観上大きな問題があり、また崩落したままの部材を放置しておくことは寺院のさらなる劣化を招く危険がありました。そこでJSTでは2012年より日本国政府アンコール遺跡救済チーム（以下JASA）の技術協力のもと、日本ユネスコ協会連盟との共同事業としてこれらの彫像や欄干の修復プロジェクトを開始することにしました。



網がけした部材は、修復前、割れたりするなどして崩落していた彫像や欄干です。

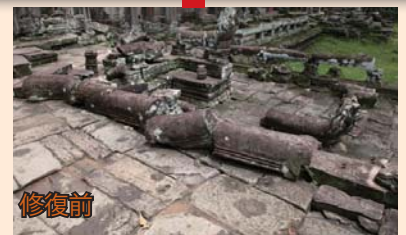
## 修復後の成果と様子

欄干や彫像の修復にあたっては、部材が地面や寺院床面に落ちてバラバラに砕けていたり、一部が地面に埋まっていることがありました。また、過去の修復の際に、元々の位置とはまったく違う場所に置かれてしまっていた部材も多くあり、単なる石材の修理だけでなく、寺院全域での巨大なジグソーパズルのような作業も行う必要がありました。ここではいくつかの修復前後の様子をご紹介します。

足の踏み場もないほどに欄干が散乱し、彫像もゴロンと床に放置され、踏まれてしまうことにより、粉々に割れた彫像がどんどん削れてしまうという状況でしたが、美しい姿を取り戻しました。

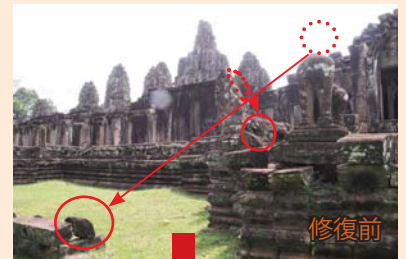


修復後

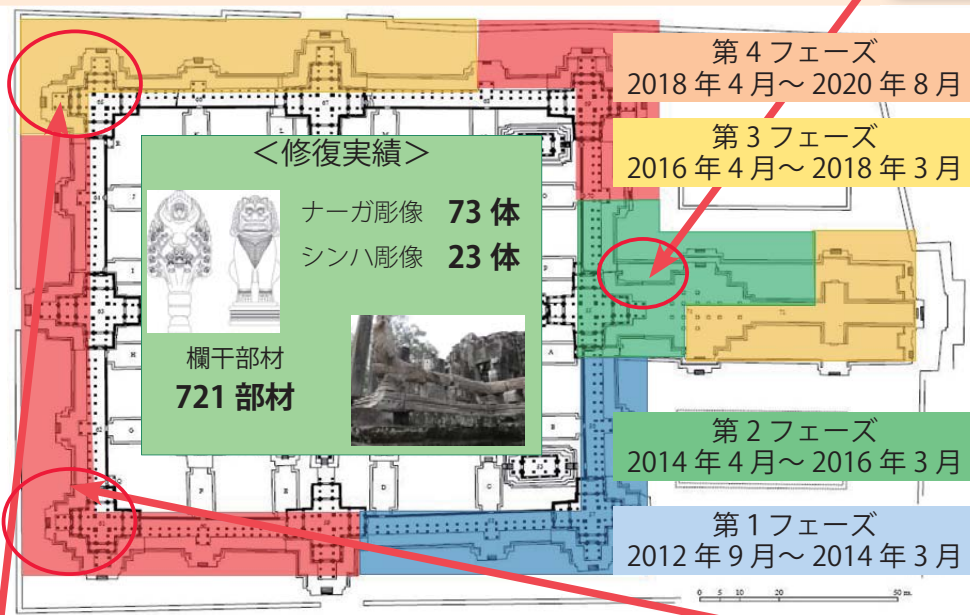


修復前

シンハ彫像の頭が地面の上に転げおち、ナーガ彫像も真っ二つに割れ、片割れが落ちていました。



修復前



修復前

修復後

ここでは多くの欄干が地面に落ちて、もはや寺院の上にはほとんど何も残っていない状態でした。



修復後



## ✓ 教員用トイレ&シャワー室が完成しました!



2020年1月、東京新橋ロータリークラブ様からのご寄贈による教員用トイレ&シャワー室（1棟2室）が完成しました。

トイレは水洗式で、シャワー室と洗面台が併設された完全個室となっています。シャワー室があることによって、3月～6月にかけての酷暑期でも、一日中教壇に立つ先生方の衛生状態を良好に保つことが期待され、また、学校体験交流ツアー（学泊）のお客様が宿泊する際のご利用も想定して作られました。

←東京新橋ロータリークラブの皆さま、

ありがとうございました！（完成式典での記念写真）

## ✓ コロナ禍におけるバイオン中高校の様子



カンボジア教育機関の臨時休校：2020年3月9日～9月6日（約6ヶ月間）  
＜上記期間の学習方法＞

1. 各教科の教師による**プリント**作成→生徒は各自学校にプリントを取りに来て、家庭で自主学習→宿題を解いて翌日、学校に提出する。

**問題点**：自力で理解できない生徒も多く、次第にやる気を失い、後半になると提出率は約2割以下となりました。

2. Telegramによる**オンライン授業**配信

**問題点**：受信できるデバイスを持っていない生徒も多く、持っていたとしても電波が弱くスムーズに見ることができないなど、うまく活用できなかったようです。



外部作業もマスク着用で行う生徒たち



生徒はマスク、教員はフェイスシールドを着用

### ＜学校再開後の教育省による規定とバイオン中高校の様子＞

- ・学校に**登校できるのは、卒業試験を11月に控えた中学3年生のみ**。その他の学年は、家で**自主学習**を行っています。
  - ・**1クラスは15人～20人**としなければならないため、バイオン中学校では**中学3年生を8クラス**に分けて授業を行っています。
  - ・密を避けるため、7時登校のクラスと7時半登校のクラスに分け、休憩も**ローテーション**で。
  - ・登校時には**体温**を測定し、**手洗い**と**マスク**着用の徹底を指導。
  - ・敷地内の**売店は販売禁止**。
- 以上の規定が順守されているか、地域の衛生委員会による定期的チェックが行われています。

### ＜今後の予定＞

- ・来年度始業：2021年1月11日（通常は11月1日）
- ・1月の運動会開催について；現時点では未定

※なお、2020年11月下旬時点で、カンボジアでの新型コロナ感染者数は合計約300名（そのほとんどが入国時に空港での検査で判明した方々です）、死者数はゼロとなっています。



『JST だより(vol. 8)』でもバイオン中学校区の村民の生活を取り上げましたが、今回も村民にインタビューをさせていただきました。今回はプラサート・チャツ村のチャン・チアさんの家を訪問した際の様子をお伝えします。



チャン・チアさん

長女

夫

## プロフィール

名前：チャン・チアさん

年齢：33 歳

居住地：プラサート・チャツ村

仕事：工事現場で勤務

(シムリアップ市内オールドマーケット付近)

収入：150 ドル/月

家族構成：夫、娘 2 人(13 才と 10 才)

最終学歴：チャン・チアさん：小学校 3 年生

夫：小学校に通っていない

## 家庭環境

### 【家】

- ・壁と屋根はヤシの葉で作られた高床式の住居。
- ・トイレや浴室はない。  
家の裏に鋤を持っていき、用を足す。  
庭の井戸の水を水がめのため、  
庭で水浴びをする。
- ・調理場は高床式住居の一階部分、  
地べたの上で調理する。
- ・水浄化装置がある(NPO からの寄付)。
- ・電気は通っておらず、小さな太陽光パネルのみ。



水浴び用の水がめ



水浄化装置

### 【生活】

- ・財産：牛 2 頭、鶏、バイク
- ・チャン・チアさんの夫：体が弱いため、働きに出ることができない。  
牛の世話をしている。収入はない。
- ・チャン・チアさん：村から 25 km 離れたオールドマーケット付近の  
工事現場で勤務。  
通勤用のバイクを買うために、マイクロファイナンスで 1600 ドルを  
借り、毎月返済をしている。(以下の表参照)
- ・食事は一日 2 食、ご飯とスープのみ。
- ・子どもには学校での間食代として 2 人合わせて毎日 6000 リエル  
(1.5 ドル)ほど渡している。(お金が足りないときには 3000 リエル)
- ・毎日の食事のお米がないこともあり、その時には近所からお米をかり、翌年の収穫で返す。
- ・常に借金をかかえて生活をしている。

### 1ヶ月の家計

収入	150ドル
支出	25ドル(ガソリン代)
	86ドル(ローンの返済)
	35~17ドル(子どもの間食代)
生活費	4~22ドル

## 長女のサエツ・シニエツさん(中学 1 年生)に話を聞きました！

### 【学校について】

地理が好きで、数学が苦手。

学校はとても楽しい。

### 母親のチャン・チアさんのことば

運動会をみて、「バイオン中学校に行かせて良かった」。

また、「良い仕事につけるよう、高校まで通わせたい」。

### 【将来の夢】

将来の夢は医者になること。

理由は「村の人を助けたいから」。

彼女は、終始恥ずかしそうにしており、あまり話を聞くことができませんでしたが、将来の夢についてははっきりと答えくれ、強い意志を感じました。しかし、数学が不得意であることや金銭面の問題など、実現するには難しい面も感じました。彼女が少しでも夢に近づくために私たちができることはないか、共に考えていきたいと思いました。

### 【インターン生の感想】

実際に村を訪れ、話を聞いてみると、自分が想像していた以上に厳しい状況であることに気づかされました。そして、頭が真っ白になってしまいました。そのような生活にも関わらず、チャン・チアさんはとても明るく前向きで、母親の強さを感じました。また、サエツ・シニエツさんの話を聞き、「村の人のために医者になりたい」という優しさに胸が締め付けられるような思いがしました。自分が日本で働いていた時、なぜ働いていたのか思い返すと、ただただ生活費のためでした。そんな自分を恥ずかしくも感じました。村を訪問し、様々なことを知り、考えさせられました。この貴重な経験をこれからの生活の中で大切にしていきたいと思えます。